

徒然の記 その十二

焚き木

子供は昔話を聞くのが大好きです。近くに住んでいる二人の孫は、とりわけ桃太郎の話が好きでした。

「昔々あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました。おじいさんは、……」と水を向けると、下の孫がすばやく「ヤマヘシバカリニイキマシタ」、と受けます。

もちろん孫は「シバカリ」がどういうものか知りません。

たぶん、大人だって知らない人がたくさんいることでしょう。

シバカリの「シバ」とは、野山に生える小さな雑木、「柴」のことで、桃太郎の話の中のおじいさんは、焚き木にする柴を拾い集めに山へ出かけて行ったのです。

焚き木には忘れられない思い出があります。それは、大谷口に疎開していた時の出来事でした。

その日は半ドンでした。学校から帰って来ると、いつも門口で出迎えてくれる祖母の姿が見えず、家のまわりはいつになくシンと静まり返っていました。

ひと間しかない掘っ立て小屋の中を覗いて見ましたが、誰も居ませんでした。

母は妹を連れて時々用足(ようた)しに出かけますが祖母が家を空けたことはありません。

昼ご飯の支度でもしているのだらうと思って、炊事場のある家の裏の方に回って行きました。

その時です。突然、裏山の斜面を大きな怪物が物凄い音を立てながら駆け下りてきました。

あの場に居合わせれば誰だって魂消てしまったでしょう。

お祖母さん子で人一倍意気地なしたわたしは、恐ろしさで縮み上がってしまいました。

くだんの怪物は、逃げることも出来ずその場に立ち竦んでいるわたしの目の前を駆け抜け、錆びトタンで囲った小屋の壁に激しくぶつかって止まりました。

怖いもの見たさ、恐る恐る壁際にうずくまる怪物の方に目をやると、なんと、そこには大きな焚き木の束が転がっていました。

…祖母が裏山で柴刈りをしていて、集めた枯れ枝や杉の枯葉を藁縄で束ねて、下へ転がして落としたのです。

駆け下りて来た怪物の正体は焚き木の束でした。

物凄い音は、焚き木の束が下草を掻き分けたり、木立に突き当たる時の音だったのです。

その頃の我が家は、大谷口の村はずれの山間にある畑を借り、その一角に掘っ立て小屋を建てて住んでいました。

畑の三方は山に囲まれていて、高さ20mほどの小さな山の斜面が、家のすぐ裏まで迫っていました。

頂上は平らにならされて畑になっていましたが、山の中腹には、雑木が茂り、下草に混じって

山三つ葉やゼンマイが生えていました。

祖母は、時々この山に入って焚き木を集めたり、三つ葉を摘んだりしていましたが、山の持ち主は心の広い人で、それを咎(とが)めようとはしませんでした。

半ドンの由来

明治から大正にかけて、時を知らせるために大砲を撃(う)っていました。

もちろん、空砲ですが、「ドン」と言う大きな音が遠くまで鳴り渡りました。

このことから、時報のことを「ドン」と言い、正午を告げる「ドン」は、一日を半分に分けることから、「半ドン」と呼んだそうです。

それが転じて、仕事や学校の授業が半日で終わる土曜日を「半ドン」と呼ぶようになった…
明治生まれの母から聞いた話です。

今でも、皇居の何処かに時報の大砲を撃った砲台の跡が残されているそうです。